病院図書館　2003；23(2)：48-51

小特集　最近の医療情勢と近畿病院図書室協議会の動向

研修会参加者動向分析

林　伴子

Ⅰ．はじめに

1975年1月にはじまった近畿病院図書室協議会の研修会は、2002年度で第101回を数えるまでになった。

各研修会・勉強会終了後には、会誌上にそれぞれの会のプログラム、参加者数、簡単な内容などを紹介した記事を掲載することを慣例としている。さらに、協議会活動の節目にあたる創立15周年、20周年、25周年には、それぞれの記念誌上で、研修活動全般の概要についての報告を行った[1) 2) 3) 4) 5)]。

また、これまで行ってきた研修内容の分析は、プログラムを主題別に分類し集計した結果報告として、第93回研修会（事例・研究報告会）で発表した。

しかし、これまで参加者の動向についてはまとめたことがなかった。そこで、これからの研修部活動のひとつの目安になればと思い、残っていた出席者名簿をもとに集計したので報告する。

Ⅱ．対象

1996年度から2002年度に行われた研修活動：

研修会	22回
勉強会	15回
見学会	1回
近畿地区医学図書館協議会シンポジウム	6回
近畿病院図書室協議会創立25周年記念フォーラム	1回

はやし　ともこ：近畿病院図書室協議会研修部
（社会保険神戸中央病院）

以上のうち参加者が判明しているもの：

研修会	16回
勉強会	12回
見学会	1回
シンポジウム	1回
フォーラム	1回

Ⅲ．集計方法

1）会誌上での研修会報告、ならびに総会議案書から各研修活動の参加者数を計上した。

2）参加者名簿からの集計では担当者の動向に注目することを目的として、賛助会員、ならびに担当者外の参加については除くことにした。

3）参加者の現在の状況を知るため、会誌上での担当交替の案内、ならびに2001年名簿での担当者氏名をチェックした。さらに、個人的な情報等から、担当者の交替、退職などの情報を加えた。

Ⅳ．結果

1）参加者総数は会員164名（92機関）、会員外は65名であった。

2）担当者の参加をみるために絞り込んだ結果、対象数は147名（91機関）となった。

3）会員機関のうち76％が何らかの研修活動に1回以上参加している。

4）参加者中56名が担当交替している（退会2機関）（38％）。

5）一度参加しただけで継続していない参加者が多い（特に基礎編参加者）。

6）事例・研究報告会に限れば、演者の多くは

幹事ならびに研修部、編集部に所属している（50％強）。また、発表後に各部会の部員になるケースも見受けられる。

結果から見る限りでは、単回の出席率はほぼ会員の1／4を占めていた（平均32.4名うち会員28.6名）。また、会員機関には近畿地区以外も数多く含まれるが（2002年現在35機関29.1％）、通常の研修会での出席では近畿地区以外から平均4.3名（13.1％）の参加があり、参加者の2割以上を占めた研修会も6回あった（表1）。

研修会活動への関心のありようは、会員機関の参加回数に反映されていると思えるが、上述した如く、会員機関の76％で何らかの研修会活動への参加があるものの、新任時の研修会への参加が多くみられ、反面、継続しての研修会参加は少ない（1回のみの参加35.4％）。

V．考察

研修会の持つ問題点としては、大きく二つ挙げられる。まず、年間開催を通した場合、複数回の出席率の低さである。二番目に、先に挙げた複数回の参加が少ないため、研修活動の継続性の保持が困難であることである。

そこで、まずは参加できない理由から考えてみたい。参加を決める条件としては開催地（施設）と日程がある。

開催地は準備の都合上、どうしても京都・大阪が多くなってしまう。遠方からでは日帰りが可能か否かはひとつの条件とはなるであろうが、今回の結果からは、近畿地区以外の参加が毎回数名はいること、京阪神地区の参加が意外に少ないことなどから、不参加の理由としての比重はあまり重くないと思える。

日程を見てみると、担当者の研修の場としては、当会の研修会以外に、年1回開催される全国を対象としたものとして、医学情報サービス研究大会、日本病院会全国図書室研究会の全国研修会（当会も共催）、日赤図書室協議会の研修会、日本医学図書館協会図書館員基礎研修会などがあり、これらの研修は夏から秋にかけての短い期間に立て続けに行われている。当会の研修会も同じ時期に年度の2回目の研修会を開催していることが多い。

研修会の実施要領について別に報告したように[6]、例年3回の研修会（うち1回は事例・研究報告会）に加え、初任者向け勉強会をはじめとした勉強会の開催を3回ほど、見学会をかね

表1．

	研81	研83	研84	研85	研86	研87	研88	研90	研93	研94	研95	研96	研97	研98	研99	研100	計
会員総数	106	109	109	109	116	116	116	120	120	122	122	119	119	119	119	119	1860
参加者数	50	40	34	33	23	30	38	32	29	32	29	25	23	26	41	33	518
会　員	35	33	33	33	23	25	33	29	29	26	29	22	21	25	29	33	458
会員外	15	7	1	0	0	5	5	3	0	6	0	3	2	1	12	0	60
会員近畿外	6（17%）	9（27%）	2（6％）	7（21%）	5（21%）	4（16%）	3（9％）	0	6（21%）	5（19%）	3（10%）	3（14%）	1（5％）	5（20%）	7（24%）	2（6％）	

た近畿地区医学図書館協議会シンポジウムへの参加など、研修部が直接かかわるものだけでも、6－7回の研修活動を行ってきた。単純に考えて、年度始めから二ヶ月に1回は何らかの出席要請があることになる。このすべてに参加することは日常業務への負担が重くなると考える担当者（管理者）があっても不思議ではない。実際問題として、選択せざるを得ない状況があると思われる。

次に問題点の二番目に挙げた研修会活動の継続性について考えてみたい。これには先の出席数、出席率が影響を与えているが、担当者のスキルアップを目指し、専門職としての病院図書館司書を目指すことが当研修部に課せられた使命であるならば、見過ごしにできない問題である。

研修部としては、資料の整理の初歩から文献検索、情報の提供など、日常業務で役立つように、順を追って研修を行う必要性について十分認識している。そうした実務面での知識を習得するとともに、新しい情報を入手し、業務に役立てていくことが図書館業務を支える基盤になると考えている。そのためにも、個々の担当者が、基本業務について共通認識を持ち、さらに最新の情報を共有できるようにスキルアップを図りたいと願っている。

しかし、入会当初のみの参加が多いことからみても、新任担当者を即戦力として養成することを期待しての参加があると考えられる。これではまるで、当協議会の研修活動が促成の図書館員の養成機能を要求されているようである。その場合は、基本を知ればそこまでで終わってしまいがちであるのが非常に残念である。

また、担当者の即戦力への期待という点では、そもそも協議会入会の意図として、担当者の技能の習熟よりも、ネットワークとしての文献の入手を主目的にしているケースがある。ネットワークの機能を利用するということ、極端な場合では機能評価をクリアするためだけに入会するということもある。そういう場合には、まず、当面の図書業務をこなせるだけの知識の入手ができれば、後の研修活動には参加しないということも考えられる。

ただし、担当者の声はここでは聞こえていないので、研修活動への参加が担当者の要求通りになっていないという可能性もある。

今回の集計結果からは、公的病院によく見られることであるが、担当者の異動が多いこともわかった。それに付随して、担当者が交代すると途端に参加しなくなるケースも多い。この場合は、「新担当者への引継ぎがうまくいかない」「交替を契機に病院図書室のあり方に対する施設内での見解が変化してきた」「次の担当者がさらに弱い立場になってきた(常勤からパート、あるいは派遣へ)」など、理由はいろいろ考えられるが、今回の集計では明らかにすることはできなかった。

以上、日程的な問題、担当者あるいは上司の考え方、また周囲の期待などの要因があって、複数回の継続参加が限られた会員だけになっているのが現状である。

Ⅵ. おわりに

以上、近畿病院図書室協議会の研修活動について出席者の動向を中心にみてきたが、これを踏まえた上で、今後の研修活動について考えてみたい。

研修会に参加することによって、何か得るものがあるというのが企画の原則であろう。

現実問題として、まずは異動や新規採用によって新たに担当者となった人々へ、ネットワークとしての協議会活動について伝えることが基本である。従来行ってきた勉強会での実務研修を定期的に行うことが、少なくとも年に一度は必要と考える。ただ、一度だけの基礎編の勉強会では図書館活動を網羅できるはずもなく、とりあえず、日常業務に支障のないようになることを願っているが、もう少し系統立てた教育活動が必要であることは前述した通りである。しかし、継続教育にはどうしても時間がかかり、

即席を求められる昨今では逆に実情にあっていないのかもしれない。そうはいうものの、必要な知識の習得のためには、個別の指導など何らかの形で継続的に行えるよう考えていかなければならないだろう。

図書館研修の場としては、当会の研修活動以外にも増えてきたので、担当者にとっては日時その他条件の合う研修会を選択する余地はある。当会の研修活動へ少しでも多く参加を求めるためには、他の研修会の日程と重ならないよう調整が必要で、具体的には2002年度に行ったようなサマーセミナー形式の研修会が望ましい。年３－４回の研修会の企画立案は数が増えれば増えるほど発想の限界があるので、集中的に行える研修会開催の方が、充実した企画ができると思われる。

その一方、これまで研修会･勉強会は大阪近辺で行ってきたが、一時期東海地区で開催したような勉強会を地域ごとに開催することによって、地理的に参加が困難な会員へ少しでも還元できればと考える。

また事例研究報告会では、年中行事のように演者探しに苦慮しているが、総会議案書に書いたように、何かあらかじめテーマを決めて研究班を構成し、一年なり半年なり時間をかけての研究成果を発表してもらう方法など、研修部の“お願い”による発表以外に何らかの打開策を見出したい。

ただし、これらの計画はあくまでも私案であり、研修部の同意を得たものではないことをお断りせねばならない。また、私が提示した計画の中には結果を得るまでには時間を要するものもあり、2003年度にそのまま反映できるものではないことは十分承知している。しかし、何か目標をもって取り組んでいくことこそが、そのスタンスをどこにもっていくかには異論があろうとも、研修部員のみならず、全会員の研修への意欲をかき立てるものになることを望んでやまない。

最後に、この報告を行うにあたり、手元の資料を整理集計していったのであるが、出席者名簿などは散逸しやすいことに改めてきづかされ､管理できていなかった現状を反省している。研修会を開催しただけで終わるのではなく、会員の現状を表すひとつの指標となるデータとして、プログラム管理、名簿管理の積み重ねが大切であると今まで以上に感じている。

参考文献

1）松本純子：研修会活動の歩み．付録・研修会記録．病院図書室．1989；10：36-55.

2）林伴子：研修会活動のあゆみ－1990年から現在まで．病院図書室．1994；14(4)：178-9.

3）林伴子：協議会研修会活動記録．病院図書室．1994；14(4)：187-93.

4）林伴子：研修部－この５年間－．病院図書館．2000；20(4)：181.

5）林伴子：協議会研修会記録．病院図書館．2000；20(4)：192-200.

6）林伴子：病院図書館員と研修活動．ほすぴたるらいぶらりあん．2002；27(3)：245-51.